「男、突っ走る！」

第119回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（25）　『オフィスツリーイン』代表
木内　真保（52）　雅也の母
高倉　文代（79）　真保の母、雅也の祖母
福沢　瑞枝（25）　元名古屋芸術専門学校学生／声の出演
植野　雪奈（25）　元名古屋芸術専門学校学生
船倉　篤志（25）　元名古屋芸術専門学校学生
谷岡　典江（58）　『スリジェネアカデミー』演技講師
北　まひる（23）　『スリジェネ』メンバー
林　亜里沙（13）　『スリジェネ』メンバー
赤澤　隆太（12）　『スリジェネ』メンバー
辻松　翔（12）　『スリジェネ』メンバー
石田　琴音（11）　『スリジェネ』メンバー
林　香奈枝（11）　『スリジェネ』メンバー
磯村　秀樹（17）　『スリジェネ』メンバー
稲本　美香（11）　『スリジェネ』メンバー
高橋　沙耶（13）　『スリジェネ』メンバー
大坂　美央（18）　元『スリジェネ』メンバー

1　新聞

雅也の写真が掲載された記事が掲載されている。

N「コロナ感染を実名で公表し、ブログで発信したことが話題となり、僕のインタビューが新聞記事に掲載されたのは横田監督の映画祭が開催される直前のことでした。繋がりは広がっていくものであり、この新聞記事を見た二つのテレビ局から取材の依頼が来て、両局とも二月末、三月上旬と、それぞれ夕方の情報番組の中で特集されました。このニュースは友人や知人、仕事関係者も見ており、コメントもいただき、ブログのアクセス数も放送終了後は驚異的な数字を叩き出しました。ニュースを見ていたのは、他にもいて……」

2　木内家・夫婦の部屋

真保が洗濯物を畳んでいる。

と、リビングから固定電話の着信が鳴

っているのが聞こえる――立ち上がって出ていく真保。

3　高倉家・居間

文代が固定電話で話している。

文代「ああ、真保。びっくりしたわよ、さっきおじいさんとテレビ見てたら、ニュースに雅が映ってるんだもん」

と、電話から真保の声がする。

真保の声「え、雅が？」

文代「何でも、コロナに感染したのを実名で公表したとかで、取材されとったよ」

4　木内家・居間

真保が固定電話で話している。

真保「ああ、何かテレビの取材が入るって言ってたわ」

と、電話から文代の声がする。

文代の声「あんたんところは、みんなコロナになったんか？」

真保「そうだよ。最初に健がなって、そこから雅も孝志も健も」

文代の声「後遺症とか大丈夫なんか？」

真保「私と健は熱もあったし、咳も止まらんかったからホテル療養になったけど、特に後遺症はないよ。雅も孝志も味覚障害とかにはなったけど、すぐに治ったしね。けどまあ、ほとんど軟禁生活みたいな感じだったから大変だったわ。母さんも気を付けてよ。高齢者は重症になりやすいんだから。もちろん父さんだってもう若くないんだしさ、お姉ちゃんだって仕事先でもらってくる可能性もあるんだから」

5　高倉家・居間

文代が固定電話で話している。

文代「こっちも増えて来とるからね。気を付けようと思ったって、かかるものはかかるんだから。コロナ落ち着いたら、またおじいさんや梢と一緒に、そっち遊びに行くわ。

うん、うん、はいはい、じゃあね。（と電話を切ると）いつになったら、コロナが落ち着くことやら……」

6　木内家・事務所（数日後）

雅也がパソコンで仕事をしている。

N「母と祖母のそんなやり取りがあり、それぞれの番組が放映された直後である三月上旬のこと……」

と、ドアが開き、美央が入ってくる。

美央「うっちー」

雅也「ミオ、よく来てくれたね。バスで来た？」

美央「ううん、駅から歩いてきた」

雅也「え、結構歩いたでしょ」

美央「三十分ぐらいかな」

雅也「まだ寒いのに……連絡くれたら駅まで迎えに行ったよ」

美央「歩くのには慣れてるから。それにしても遠いね。うっちー、よくここからいつも

通ってたね」
雅也「まあね」
×　×　×
ジュースを飲みながら話している雅也と美央。
雅也「改めて、高校卒業おめでとう。そして、大学合格おめでとう」
美央「ありがとう」
雅也「ミオも、東京に行っちゃうのか」
美央「コウタもとみーもナオも、向こうにいるもんね」
雅也「まだ東京の方も、コロナで大変だろうに」
美央「そうなの。だからね、大学の寮も四人部屋のところを二人部屋にするんだって」
雅也「人数減らしたって、大して変わらないと思うけど」
美央「さすが、一度感染した人は説得力が違うね」
雅也「（苦笑して）本当に大変だったんだか

ら」

美央「でも無事で良かった。私の周りには、まだ感染者がいなかったから、油断してたの。けど、うっちーがなったって聞いて、やっぱり油断しちゃいけないなって」

雅也「本当そう。大学行ったら、それこそクラスターとか気を付けないとね」

美央「そういう心配もあって、大学の授業は、しばらくリモートになるんだって」

雅也「なかなか難しいよね。実はね、スリジェネのレッスンも、一時期はオンラインになったこともあったの。でもさ、ああいうのってやっぱり直接じゃないと厳しいじゃん。そりゃ会議とかもさ、内容によってはオンラインでもできそうだし、県外の人とすぐ打ち合わせもできるから、状況によっては便利かもしれないけど、演劇とか授業とかは、やっぱり対面のほうがねぇ」

美央「そりゃそうだよ。私さ、今月末のヤマさんの劇団の舞台に出るの」

雅也「ああ、そういえば告知来てたわ」
美央「その舞台が、こっちでは最後になる」
雅也「東京でも演劇続けるの？」
美央「まだ分かんないけどね。大学入って、何か新しいことやるかもしれないし」
雅也「そっか。今日、夕飯ごちそうするわ。ミオの合格祝い」
美央「やったーッ」

7　食事処（夜）

ひつまぶしを食べながら話している雅也と美央。

雅也「不思議とさ、スリジェネのメンバーの中にはもう連絡取らなくなったり、疎遠になっちゃった子もいるけど、不思議とミオとは結構連絡取り合ってたもんね。何だかさ、ミオは妹みたいな存在だったわ」
美央「ありがとう。でも確かに、うっちーとはこうして親交続いてるよね。それにさ、うっちーのオンライン授業受けたこともあ

ったじゃん。大学の自己ＰＲが書けなくてさ、あの時は本当に助かった」

雅也「あったね。初めてスリジェネの舞台に立った時から、ミオとは共演シーンも多かったじゃん。初めて舞台に立った『七夕物語』とか、カウントダウンイベントとかさ」

美央「懐かしいね」

雅也「それに、散々演出で苦戦した市民演劇祭では、ミオが主演やってくれてね」

美央「あの役、私今でもやって良かったって思ってる。私にとっても、初めての主役だったし」

雅也「ずっと一緒に稽古してて、ミオは主役が向いてると思ったの。だから、当て書きみたいなもんだったんだよ」

美央「あの時のうっちーは、倒れそうで心配だったけどね。まあ大変なのは、無理もないけど」

雅也「代表降りて正解だった。その後は楽しかったよ、『神様が願うまで』は特に」

美央「あれだけのメンバーが揃ったんだもんね」
雅也「ゆーさくと付き合ってるって聞いたときはびっくりしたけど」
美央「あったね、そんなことも」
雅也「ミオと別れてすぐにゆーさくと二人で飲んだんだけど、ミオの一目ぼれでゆーさくに告白したんだって」
美央「違うよ。告白したのは、向こうから」
雅也「あれ、意見が食い違ってる。まあどっちでも良いか、もう終わったことだし」
美央「そうだけどさ」
雅也「ゆーすけ曰く、ミオは嫉妬深いって。女友達と遊ぶだけで怒るって」
美央「あいつ、そんなこと言ったの？」
雅也「違うの？」
美央「だって、ゆーすけ。女友達っていう大学の同級生のマンションに泊まったんだよ」
雅也「大学生にでもなれば、男女の友情はあるんだから、泊まることだってあるでしょ」

美央「いや、あれは絶対やることやってた」
雅也「（絶句して）ミオ……とうとうそんなこと言うようになっちゃったのね」
美央「そりゃ、もう四月から大学生ですから」
雅也「（感慨深く）一期生のオーディションの時は、まだ中学卒業して間もない高校一年生だったのにね」
美央「ねえ、うっちー」
雅也「……？」
美央「私が成人になったら、みんなでお酒飲もうね」
雅也「うん、楽しみにしてる」
微笑んで頷く美央。

8　中央公民館・全景（二週間後）
N「二週間が経つと、子どもたちは春休みになり、平日のある日、谷岡先生の要望により、成果発表会の個人稽古を行うことになりました」

9　同・和室

雅也、まひる、亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀樹、美香、沙耶が準備運動をしている。

亜里沙「あれ、今日美穂子さんと千世ちゃんは？」

雅也「美穂子さんは仕事で来れなくて、千世は部活だってさ」

まひる「アリサちゃんもサヤちゃんも、春休みの部活はないの？」

亜里沙「私、休んだ」

沙耶「私も」

隆太「部活休んで大丈夫なの？」

香奈枝「お姉ちゃんは、部活よりもスリジェネのほうが大事なんだって」

雅也「嬉しいね、そういう風に考えてくれると」

秀樹「そりゃ、部活よりこっちのほうが楽しいもんな」

まひる「ヒデも部活休んだんだ」

秀樹「はい」
雅也「翔と隆太は、もう小学校の卒業式も終わって、のんびり春休みだもんね」
まひる「早いなぁ。二人がもう中学生か」
秀樹「春休みの宿題もないし、成果発表会に専念できるな」
翔「うん。映画も無事に終わったし」
雅也「撮影大変だったけどね」
琴音「うっちーの、あんなシーンも見れたしね」
翔「あれは、ヤバかったな」
雅也「俺が一番ヤバいと思ってる」
沙耶「何、あんなシーンって」
雅也「ノーコメント」
沙耶「えー」
と、谷岡が入ってくる。
谷岡「おはようございます」
一同「おはようございます」
谷岡「みんな、準備運動終わったら、最初から一度通していきますよ。美穂子と千世が

今日休みって聞いてるので、二人はセリフを私が読みます。一生懸命頑張りましょうね」

一同「はいッ」

10　栄駅・改札口（数日後）

N「上京前最後の舞台公演を終え、ミオは東京へ旅立っていきました。そして新年度が始まってすぐの四月上旬のこと……」

雅也が切符を入れて改札口を出て、歩いていく。

11　同・クリスタル広場

雅也がやってくると、目線の先に雪奈と篤志が既に来て待ち伏せをしている。

雅也、二人の姿に気が付くと、走っていき、

雅也「お待たせッ」

雪奈「うっちーッ」

篤志「よし、揃ったな」

雪奈「行こッ」

と、歩いていく三人。

N「この一年近く、コロナによって毎年恒例に行ってきた飲み会が開催できなくなっており、飲食店では営業時間短縮や会食は四人以内という制限はまだ続いていました。そんな中で集まったのがこの三人という顔ぶれでした」

12　居酒屋

雅也、雪奈、篤志がジョッキビール片手に飲みながら、食事をしている。

雅也「まだ三時半だよ」

雪奈「しょうがないよ、時短営業の店が多いんだもん」

篤志「直接の飲み会なんて、一年ぶりぐらい？」

雪奈「そうだね。確か、去年の二月にやって、すぐコロナが来たもんね。一回リモート飲み会はやったけどさ」

雅也「やったね。でもさ、リモート飲み会って画面切れた後のシーンと空気が嫌だよね」
雪奈「それな。やっぱり余韻も楽しまないとね」
篤志「本当だよな」
雅也「（ビールを飲んで）ああ、味が分かるって最高」
雪奈「元気そうで良かったよ」
雅也「お騒がせしました」
篤志「うっちーがコロナになったことで、注意喚起になったよな。俺たち同級生の中では、影響力がある人間だし」
雅也「そんなことないって」
雪奈「ニュース、録画して見たよ」
篤志「ニュースって？」
雪奈「あ、そっか。あつぽん、京都だから映らないんだ。こっちの夕方の情報番組で、うっちー取材受けてて、特集組まれてたんだよ。コロナを公表して、ブログで情報を発信した人がいるって」

篤志「うわぁ、見たかったな」
雅也「録画したから、今後見せてあげる」
篤志「ありがとう」
雪奈「一年の間に、うっちーはコロナに感染するし、眞榮田は脳腫瘍で倒れるし、いつ何があるか分かんないね」
雅也「眞榮田のこと、ゆきちゃんに報告遅くなって申し訳なかったね。過去のことがあったから、事後報告みたいになっちゃったけどさ」
篤志「もしかして、ビデオレターの件？」
雅也「うん。ゆきちゃんには、ビデオレターのこと連絡しなかったの。眞榮田もさ、ビデオレターに元カノが映ってたら、いくらもう終わったことでも、複雑かなと思って」
雪奈「今、あいつどうしてるの？」
雅也「半身不随になって、一生懸命リハビリ頑張ってるって」
雪奈「そっか。元気なら良いよ」
篤志「さて、過去の話はこれぐらいにしてさ、

今日はいつまで飲むよ？」

雅也「あつぽん、ハシゴする気満々じゃん」

篤志「当たり前だろ。そのために京都から飛んできたんだから」

雪奈「私だって、今日休日出勤したくなかったから、昨日残業まで仕事終わらせたんじゃん」

雅也「俺だって、今日は何も予定入れなかったし」

篤志「よし、じゃあ今日は一年集まれなかった分だけ飲むぞ」

雪奈「そうだね」

微笑みながらビールを飲む雅也。

13　立ち飲み居酒屋

雅也、雪奈、篤志が飲んでいる。

N「飲み会は盛り上がり、何軒かの居酒屋をはしごしました。そして、最後は……」

14　テレビ塔の下の広場（夜）

夜桜にライトアップがされている――
その一角に座り、コンビニの袋に入った缶チューハイを取り出して乾杯をする雅也、雪奈、篤志。
一同「かんぱーい（と飲みだす）」
雅也「いやぁ、今日は大分飲んだよ」
雪奈「何軒ハシゴしたっけ？」
篤志「（指折り数えて）えっと……四軒飲んで、ここ含めると五軒目ってことになる」
雪奈「そんなに私たち飲んだんだ」
雅也「しばらく酒は良いかなぁ」
雪奈「だね」
雅也「楽しくて、みんなと会えるんだったら、それだけで良い」
雪奈「コロナ、いつ収束するかな」
篤志「またみんなで集まりたいしな」
雅也「そういえば、この間コロナに感染したとき、みずちゃんからこんなＬＩＮＥが届いたの（とスマホを見せる）」
メッセージと共に瑞枝の声が流れる。

瑞枝の声「うっちー。コロナ大丈夫？　東京でも感染者が増えてるし、うちの会社も感染者の報告を聞きました。あれだけみんなと集まってワイワイしたのが嘘のように、今は全然集まれません。早く元気になってね。そして、コロナが収束したらまたみんなで集まって飲み会やろうね。今はしっかり休んで養生してください。体だけは大事にしてね」

雪奈「みずちゃんとも、全然会ってないもんね」

雅也「毎回大勢で集まってたけど、この三人だけで集まるのって、今回が初めてだよね」

篤志「確かに」

雪奈「いろんな要請が解除されるまでは、多分四人以下の食事は続くと思う。それまでは、私たちだけでも集まろうよ」

雅也「そうだね」

篤志「いやぁ、今日は楽しかったわ。やっぱり、専門のメンバーで会えるのって良いな」

雅也「うん」

雪奈「私も楽しかった」

雅也「この時間が、ずっと続いたら良いのにね」

篤志「だな」

雪奈「ねえ、夜桜を背景に写真撮ろうよ」

雅也「うん」

篤志「ＯＫ」

雪奈、スマホを取り出して、カメラを起動する――雪奈を中心に、両側に雅也と篤志が並び、雪奈がシャッターを押す。

写真に映る雅也、雪奈、篤志。

Ｎ「この日以来、三人のグループＬＩＮＥが出来て、名前は『夜桜飲み会』となりました。三人での楽しい飲み会の余韻に浸りながら、僕は本番を二週間後に控えた成果発表会に向けて稽古を重ね続けていきました」

つづく